
くまの物語（短編集）

リック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

くまの物語（短編集）

【Nコード】

N00130

【作者名】

リック

【あらすじ】

くまの物語を集めた童話短編集。

大人も子供も楽しめるものを目指しています^^

バイバイ

【バイバイ】

「わぁ、この子かわいい」

ツインテールの小さな女の子が、ぼくたちの入ったワゴンを見つめる。

でも、女の子が手を伸ばしたのは、ぼくじゃなくてウサギの子。

一人、二人、三人・・・お父さんやお母さんに連れられた女の子たちが、

ぼくの友達を次々と抱きかかえてレジに行く。

袋に入れられた友達は、女の子に抱きしめられながら、

「バイバイまたどこかで会おうね」と言いつて、

どこの誰だか分らないおうちの子になっちゃう。

でも、もうワゴンにはぼくだけ。一人ぼっち・・・。

ある日、お店の人が、ぼくみたいに「売れのこった子」をたくさん抱えて、

ぼくと同じワゴンに放り込んでいった。

新しく張られた紙には「最終処分・バーゲン品」の文字。

また売れのこつたら、捨てられちゃうのかなあ・・・。

糸やボタンをはずされて、リサイクルに出されちゃうのかなあ・・・。

次の日も、その次の日も、またその次の日も、

「よそのおうちの子」になるのは、ほかの子ばかり。

ある日、お店の人がやってきて、ぼくを乱暴につかんで段ボールの中に閉じ込めた。

中は薄暗くって、ホコリっぽくって、

周りには汚くなったりボタンや糸がちぎれた子がたくさん。

みんなシクシク泣いてた。

そしたらぼくも悲しくなって、

気づいたら頭の中は「新しい家の子」になった友達の幸せそうな笑顔ばかり。

ぼくはこの段ボールの中でずっと過ごすのかなあ、

それとも、最後の最後にはお家が見つかるのかなあ……。

明日のお天気は晴れだといいな。ぼくがしめってカビないように。

リサイクルに出されても、生まれ変わるなら、またおんなじクマのぬいぐるみがいいな。

お別れした子と出会っても、分かってもらえるように。

あれから一週間たったけど、ラッキーなことに雨は降らなかったみたい。

いよいよ、明日ぼくたちの段ボールが廃棄処分に出されちゃう。

この一週間で16個の段ボールが廃棄処分の工場に出されちゃった。

工場に出されたら、最後どうなるんだろう……。

——次に生まれ変わったら、大事にしてくれる子に出会えるかな。

でも、捨てられる前に、誰かと一緒に流れ星が見たかったなあ・・・。

次の人生はいいことあるかな。

きみはぼくに気付いてくれるのかな。

今度は夜空を見られるかな。

END

大好きなきみへ

【大好きなきみへ】

いつもありがとう。ぼく、きみといられてずっと幸せだったよ。

ぼくがお家に来たのは、きみが2歳のとき。パパとママからのお誕生部プレゼント。

きみはぼくに「ぼこ」って名前をつけて、耳や手をしゃぶって遊んでくれたよね。

よだれでベトベトになるのはちょっといやだったけど、きみがぼくを大切にしてくれてたから、怒ってないよ。

いやな事があると、ぼくをダンスにぶつけてみたり、嬉しいことがあると「たかい、たかい」してくれたり、

寂しいときや悲しいときは、ぼくに相談してみたり……。

言葉はしゃべれなかったけど、動くことは出来なかったけど、

きみが始めて1人でお着替えができたこと、幼稚園に入ったこと、

お友達とケンカして泣いたこと、

小学校に入ったこと、いっしょうけんめい、苦手な算数のお勉強をがんばってたこと、

ママの誕生日にこっそりプレゼントを買ってたこと、好きなおとこの子のこと、中学生になったこと……。

全部、知ってるよ。小さい頃からきみを見てきたもん。

おおきくなって、ぼくと遊んでくれなくなっても、ぼくは寂しくないから大丈夫。

だって、きみがおおきく成長したしるしだから。

ぼくはずっと幸せだったよ。

ずっとずっと、きみの幸せを願ってるからね。

明日でとうとうお別れだね。でも、ぼくはきみの心の中にもいつでもいるよ。

おおきくなったね。結婚おめでとう。

END

おとぎの国のくま

【おとぎの国のくま】

昔、ある国にとてもかわいいクマの女の子ティーヌがいました。

ティーヌは貴族にもかかわらず、

貧しい人や食べ物のない人たちに食料や金貨、宝石を分けてあげるような

とても心のやさしいクマでした。

ある日、ティーヌの家にお父さんが後妻を連れて来ました。

後妻は、とてもお化粧がきつく香水の香りがひどい、ケバケバしいクマでした。

「おとうさん、その方はどちら？」

ティーヌがそう尋ねると、お父さんはにっこりと笑って言いました。

「おまえの、新しいお母さんだよ」

「はじめましてお母さん」

と、ティーヌは後妻に頭を深々と下げてあいさつしましたが、

後妻はティーヌを見つめてうなずくだけでした。

*

お父さんが貴族会議のため遠くへと出張にいくと

後妻はいじわるくティーヌをいじめ始めました。

「ティーヌ！ あんただろう、私のコーヒークップを盗ったのは！
！」

「お母さん、あれは元々この家の物です。ですから、貧しい人たちにあげたのです」

「なんだって！ 路上のクマにやっただっていいのかい！？ あの高級なカップを」

「ですがお母さん、貧しい人たちがそれで一人でも助かるのなら・
」

「うるさい、うるさい、うるさい！ 口答えは無用だよ、罰として私が帰ってくるまでに」

屋敷中をきれいに掃除しておきな！ チリ一つでも残っていたら許さないよー！！」

後妻はそう言つて、掛けていたシヨールをティーヌに押し付けると、新しいシヨールを身につけて、屋敷から出て行ってしまいました。

ティーヌは後妻のいなくなった玄関をぼんやりと見つめ、大きくため息をつきました。

「お部屋の掃除、面倒だなあ・・・」

後妻のシヨールをソファの方へと投げ、

ホウキを取り出そうと物置の扉をあけると、

なんと、そこには眩しいほどの光が広がっていました。

「なんなの、これは」

ティーヌは驚きながらも、後妻の言いなりになりたくない気持ちから光の中に足を踏み入れ、奥の方へと突き進んでいきました。

*

ふと気付くと、気持ちのいい芝生の上に寝転んでいました。

ティーヌはあわてて起き上がり、周りを見渡しましたが、

一面、空と芝生が広がるばかりで、ほかには何もありません。

「ここはどこ？　だれか、だれかいらないの？」

ティーヌがそう呼びかけても、返事が返ってくることはなく

周りはいいとしたまま、小鳥たちの小さなさえずりが、むなしく聞こえるだけです。

「こんなにすがすがしい場所なら、お父さんと来ればよかったなあ・
・・」

果てしなく広がる芝生を見つめながら、そう呟くと、

不意に、目の前に会議中のはずのお父さんが現れました。

「お父さん！」

お父さんは何も言わず、ただ気味が悪いほどにニツコリと笑っているだけです。

「お父さん？」

お父さんはまだ笑ったままです。

ティーヌは次にお母さんの名前を口にしました。

するとどうでしょう、天国にいるはずの可愛いお母さんグマが目の前に突然現れました。

そう、このお父さんやお母さんはこの場所が作り出した「幻」だったのです。

不意に、風が吹いたような音が後ろから聞こえ、ティーヌがあわて振り返ると、

なんとそこには、あのいじわるで化粧の厚い後妻がおかしな杖を持つて立っていました。

「驚いたか？　ここは《願いの草原》。願えば、どんなものでも現れる。

私が135年間もの間、苦勞して魔法で作り上げた場所だ。

それなのに、何らかの理由でお前の家にこの場所へのワープが開かれた。

この場所をだれかが知るのを阻止するため、私は後妻としてあの家に行ったのだ。

だが、見てしまった以上、ただでは帰せぬ。・・・この術を受けるがいい！！」

後妻・・・魔女が先のとがった杖を一振りすると、黒いモヤモヤが現れ、

ティーヌはすぐさま飲み込まれてしまいました。

魔女の笑い声が音のない草原に響きました。

*

気がつくと、草原ではなく自分の屋敷の床に倒れていました。

体を起してみるとびっくり。

なんと、自分の爪や毛から金色の粉が、サラサラと落ちてゆくではありませんか。

その砂を見つめていると、急に気分が悪くなり、急いでキッチンへと駆け込むと、

今度は、口の中から眩いばかりの光を放つルビーが出てきました。

ティーヌが驚いてその赤い石を持ち上げると、次から次へとあらゆる宝石が口から出てきました。

毛からは金、口からは宝石——それは止まることはありませんでした。

しかし、優しいティーヌは、その宝石や金を貧しさに苦しむ人たちに分け与えつつけました。

路上でボロボロの毛布に寄り添っていた親子グマや、寒さに震えるおじいさんグマ、

その他大勢の困っていた人たちは、徐々に町から消えていきました。

やがて町には大きな家や施設が次々と建ち、

住民たちは安心して暮らしていけるようになりました。

しかし、貧困に苦しむ人たちはまだたくさんいます。

ティーンがやつれた体にシヨールを巻いて、

いつものように貧しい人たちに食料や宝石を届けていると、

突然、目の前にあの魔女が現れました。

「どうだ、私の呪いは！ お前は最後には宝石や金になって消えてしまふのさ！！」

わたしのテリトリーを荒らしてくれたお礼だよ！」

魔女は、青ざめて今にも倒れそうなティーンを見てかん高い声で笑いしました。

「いいんです。たとえ最後には消えてしまっても、町の人が助かるなら悔いはありません」

うつすらと笑いながらそう言うティーンを、少し気の毒に思った魔女は、笑うのをやめて、

しぶしぶ、「呪いを解く薬」を渡しました。

「おまえはバカだよ、世界一のバカだよ」

そう言い残して、化粧の厚い魔女は粉雪の道へと消えてゆきました。

*

しかし、ティーヌは自分の身を削って貧しい人に金や宝石、食料をあげ続けました。

どんなにやつれていても、骨のようになってしまっても、

「呪いを解く薬」を飲むことはしませんでした。

そして、ティーヌは最後、価値もないような小さなダイヤモンドを残し、死んでしまいました。

そのかわり、町には笑顔があふれています。

しかし悲しい事に、呪いのことも魔女のことも知らない住民たちは、ティーヌの努力も、

あの宝石や金が「ティーヌの命」を削って作られた物だということを知りませんでした。

*

貧しい人々のために尽くし、人知れずとして消えていった「命」の物語は、

魔女だけが知っている、遠い遠い国のお話・・・。

* E N D *

あなたとピヨロの物語（前書き）

ひよこの物語です。

「くま」でないのですが

一話完結で独立させるには短すぎるので
こちらに置かせて頂きました。

あなたとピヨコの物語

【あなたとピヨコの物語】

ここに、ある一匹の鳥がいます。

その鳥は小さな小さな5つのタマゴを一生懸命あなたのためにいます。
ふ化まで、もうすぐです。

あなたは、卵料理が大好きです。

今日もハムエッグと卵ロールとサンドウィッチを食べました。

卵が好きなあなたのために、

今日は知り合いが自分の経営する牧場に招待してくれていました。

そこには牛や豚、そして「卵」を生む鳥もいます。

あなたは鶏肉も大好きです。卵と並ぶほど好きです。

あの一匹の鳥は、ふ化を始めた4つのタマゴを懸命に見守っています。

しかし、1つだけふ化が始まりません。

あなたは知り合いに案内されて、

鳥たちが飼育されている場所へとやって来ました。

あなたは鳥たちとタマゴを見て、すぐにヤキトリとハムエッグを想像しました。

口からはヨダレがこぼれています。

あなたは親鳥から奪うようにして、ふ化の始まっていないタマゴを取り上げました。

親鳥はほかの卵に夢中で気づいていません。

あなたが手にしたタマゴを見て、知り合いは「あげる」と言いました。

あなたは大喜びです。

あなたは家に帰ると、

もらったタマゴをキッチンにおいて目玉焼きを作る準備を始めました。

あなたはタマゴが食用のものでない事を知りません。

フライパンを火にかけたたん、

うんともすんとも言わなかったタマゴがふ化を始めました。

タマゴはパリパリといいながら割れていき、

中から小さくてふんわりした黄色い生き物が顔を出しました。

「ピーピー。ピヨ」

あなたはびっくりして飛びのきました。

ヒヨコはカラから出てよちよちとキッチンの上を歩いています。

あなたはヒヨコをじっと見つめました。

頭の中では動いているのヒヨコではなく目玉焼きです。

ヒヨコもあなたをじっと見つめ返しました。

「ペヨペヨペヨ」

あなたはヒヨコを捕まえようと思いました。しかしヒヨコは逃げていきます。

あまりにすばしっこいので、「目玉焼きにならないならいいや」と、

ヒヨコを無視してキッチンから出ようと思いました。

しかし、ヒヨコはよちよちとキッチンから下りてあなたの後ろを付いてきます。

ヒヨコは最初に見たものを親だと認識する習性があるのです。

あなたはそれでもヒヨコを無視して、

リビングのソファーに腰掛け、卵料理の本を読み始めました。

しかし、ヒヨコはソファーの下でうるさいほど「ペヨペヨ」言っています。

あまりにうるさいので、あなたは雑誌を飲むのもやめて、

まだ日が落ちないうちから眠ることにしました。

寝室に入り、ヒヨコをリビングにしめ出すと、ヒヨコは一層うるさ

くなりました。

「ピョピョ、ピョピーピーピー」

明日になればニワトリになってるかもしれない。そしたらヤキトリにしよう。

あなたはそう考えて我慢することにしました。

耳にはヘッドホンも付けています。

次の日になりました。あなたはチキンを作るため、

キッチンへと向かいました。

しかし当たり前、鳥はヒヨコのままです。

「ピーピーピョッピー」

あなたはため息をつきながら、床からヒヨコを拾い上げました。
とてもふさふさしています。

ヒヨコのつぶらな瞳がうるんでいます。

今まで感じたことのない、温かい気持ちを感じました。

あなたは初めてこのヒヨコを「食べ物」ではなく「動物だ」と認識しました。

卵好きが災いして、

あなたの頭の中ではみんな「食用」にしか見えなくなっていたのです。

「ピーピーピヨ」

あなたの手の中で、ヒヨコがエサをねだり始めました。

あなたはすぐさま昨日のオムレツの残りをヒヨコ与えました。

共食いになっていることに気付かずに。

あなたは「なぜか共食いしている」ヒヨコを手の上で見つめて、笑いかけました。

ヒヨコはエサをほおびりながら、幸せそうにあなたを見つめ返しました。

あなたはヒヨコに「ピヨコ」という名前をつけました。

もちろん、食用ではなく「友達」として。

それからというものの、あなたは毎日大切にピヨコをお世話しました。

共食いのオムレツをあげたり、意味のないブラッシングをしたり、

お風呂に入れて「ゆで鳥」になるところだったことも。

ピヨコが迷惑するようなメチャクチャな世話の仕方でしたが、

これもあなたの愛情表現でした。

「ピーピヨピー」

今日も、あなたはピヨコを石けんで洗っていました。

それもただの石けんでなく、高級シャンプーです。

おかげでピヨコはフローラルの香りになりました。

ピヨコは気に入っているようです。

次にあなたはピヨコの小さなからだにドライヤーをかけてやりまし

た。

あまりの熱さに、もう少しでヤキトリになるところでした。

風力が強すぎて、頭の毛が飛んでハゲました。

あなたはピヨコのハゲたところを黄色いマジックペンで塗りました。

それでもピヨコは喜んでいます。

あなたとピヨコはこんな風におかしな生活を続けていきました。

でも幸せでしょう。

たぶん。

END

ぼくらはみんな生きている？

【ぼくらはみんな生きている？】

あるところに、それはかわいいクマがいました。

クマは毎日毎日、「あるおうち」にすむ黄色いクマさんのハチミツを夜な夜な食べていました。

ある日のこと、その家の女の子は自分のぬいぐるみが持っているハチミツが

少なくなっていることに気づいて、急いでお母さんに相談しました。

しかし、お母さんはなかなか信じてくれません。

「ぬいぐるみのハチミツがなくなるわけないでしょ。見間違えたんだって」

「違うよ、ほら、きのうはこのツボの「ここ」まであったもん！」

女の子はぬいぐるみの持つツボをお母さんに見せながら必死でそう訴えました。

それでも、お母さんはクスクスと笑いながら二階へと言ってしまい

ました。

＊＊

ある夜のことです。

またあのクマは、黒いソファアの上でハチミツをなめている黄色いクマさんにすり寄って

ハチミツをなめていました。

「うんうん、おいしいな。ぼくだってお腹が減るんだよ」

「わかるよ、ボクもね、朝や昼はハチミツのツボを後ろに隠して動けないふりをしてるけど

本当は夜になるとちゃんと動けるし、食べ物だつてだべるんだ。

でも、だーれも気づかない。そして、朝日が昇るとまた動けないししゃべれない」

黄色いクマさんはうでにツボを抱えながら陽気に笑って言いました。

しばらくすると、マロンクリーム色の服を着たおさるさんもテレビの上から下りてきて、

大きな黄色いクマさんも、小さなクマさんも、中くらいのくまさんも、

白いピンクの飾りをつけたクマさんも、ドーナツ型のくまさんも、

みんな混ざってワイワイと

ハチミツパーティーを始めました。

「ねえねえ、一クマ足りないよ？ あのもコモコの子は？」

いちばん小さなクマさんが、ハチミツをなめながら部屋中を見渡し
ながら聞きました。

すると、かわいい、黄色でないクマが言いました。

「あの子はね、あったかい毛布の中で寝てるよ。ぼくはベットの
の、作ってもらったお布団から
そうっと抜け出してきたけど、あの子はまだ眠いみたい」

「ふーん。つまんないなあ・・・」

白いピンク飾りのくまさんと、大きなクマさんが口をそろえて言
いました。

「でも、また明日もあるよ。明日といわずに明後日も、その次も、
その次も・・・」

だから今日はこのメンバーだけでパーティーをしよう」

いちばん小さいクマさんがそう言ったのをキツカケに、再びハチミ
ツパーティーが始まりました。

＊＊

どのくらい経ったでしょう。気づくと、もう時計の針が5時45分を指していました。

「大変だ！ もう朝が来る。みんな、元の場所に戻れー！！」

中くらいのくまさんが叫んだのを合図に、

クマやサル、ぬいぐるみ達はいっせいに元場所に走り出しました。

クマさん達は、元の黒いソファーに座り、

変に思われないように昨日と同じ場所に座ったり転がったりしました。

お猿さんはつるつる滑るテレビのはしっこを木登りするように一生懸命にのぼって、

やっと頂上に着くと、そこにちよこんと座って、まるで「おいで」をするように

いつものように大きく手を広げました。

黄色でない、かわいいクマは、さあ大変です。

一生懸命、一段一段階段を上り、真ん中の踊り場で長い足を使ってジャンプして、

次の段にしがみつきました。

階段を上るのにも一苦労です。

必死に段を上って行って頂上に着くと、廊下を走って、

少し戸を開けておいたすぐそばの部屋に駆け込みました。

ねずみ色のじゅうたんの上を、眠っている女の子に気づかれないように

ゆっくりと歩きながら、ベッドの柱を探しました。

ようやく柱が見つかり、お猿さんのぬいぐるみのように、少しずつ登って行き、

たどり着いたベッドの上に置いてある、

作ってもらった自分専用のピンクのお布団に滑り込みました。

時計の針が6時ぴったりを指していました。ギリギリで、間に合ったのです。

女の子はお母さんに起こされ、眠い目をこすりながら、なんとなく、

大事にしているクマのぬいぐるみを見ました。

いつもと変わらないクマのぬいぐるみ。

いつものように、お布団の中でちゃんと寝ています。

女の子がゆっくりと、部屋を出ようとしたその時、ふっと、声が聞こえました。

《またハチミツ食べたいな》

女の子は少しびっくりしてベッドを振り向きました。

しかし、クマのぬいぐるみはそのままです。

しばらく、ぬいぐるみを見つめていると、お母さんの怒った声が聞こえ、

女の子はあわてて部屋を出て、バタバタと階段を下りて行きました。

クマのぬいぐるみはぼんやりと天井を見つめながら心の中でクスクスと笑っていました。

《ぼくの心の声、聞こえちゃったかなあ。いつか、生きてるって分かってくれるといいな》

*
*
E
N
D
*
*

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0013o/>

くまの物語（短編集）

2010年11月2日01時44分発行